名桜大学紀要，(21)：167-172（2016）

【実践報告】

日本人の中国語初学者に対する発音速習指導法

A Rapid Learning Method of Chinese Pronunciation for Japanese Beginner

中　山　登　偉

要旨

近年，中国の急速な経済発展により，将来の就職に有利であろうという考えから，中国語を勉強する大学生が急増しているが，日本のほとんどの大学では，中国語は，教養科目として週１～２回で１年間程度のクラスしか開講されていない。これだけを見るかぎりでは，中国語を学生に身に付けさせるのは非常に無理があるように思える。しかし，日本人は他の非漢字圏の学習者に比べ，特にわざわざ漢字の暗記や練習の必要がないというアドバンテージを持っているので，発音さえできるようになれば，１年間の学習期間でもかなり上達することが可能である。本稿では，日本の初級中国語教育における発音指導に関する問題点と改善点を指摘した上に，筆者のこれまでの発音教育実践例を挙げ，日本語の特徴に合わせ，日本人学習者に難しく感じないような速習指導法を論じる。

キーワード：中国語発音，拼音，声母，韻母，声調，指導法

１．はじめに

21世紀に入ってから，中国経済が急速に発展してきたことにより，中国語の人材を求める企業が年々増え，中国語検定試験やHSKのような中国語能力証明は企業の人事採用や昇進時における重要な参考指標となっている。特に，最近マスコミで頻繁に報道されているように，これまで訪日者数１位であった台湾と香港からの観光客に加え，中国大陸からの観光客も殺到している。今，全国各地の観光施設やホテル，レストラン，スーパー，家電量販店等の企業では，中国語の運用能力をもつ人材が求められている。このような社会環境の中に，将来の就職のために中国語を勉強したい大学生は急増している。

しかしながら，中国語の社会ニーズが高まっているにも係らず，中国語専攻を有する一部の大学を除き，一般の大学では，依然として中国語は教養課程の第２外国語科目として位置づけられており，１年間の選択科目として，週２コマ程度の初級レベルの授業がしか開講されていない。そのため，中国語人材の育成はなかなか厳しい現状にある。大学側が中国語の時間数を増やして頂く必要がある一方，いかに指導法を工夫し，限られた期間内で最大限に学習効果を上げ，できるだけ速い上達をはかることは担当教員の課題である。

本稿では，日本の初級中国語教育における発音指導に関する問題点を指摘した上に，筆者がこれまで行ってきた教育例を挙げ，日本語や英語の発音と比較しながら，中国語発音の速習指導法について論じる。

２．発音勉強の前に指導すべきこと

今日本の初級中国語教育において，決まった大学用の教科書が少ないようである。市販されている中国語に関するテキストが沢山あるが，最初からすぐ発音や会話の勉強に入るものが多く，中国語の文化的背景に関する内容の紹介に欠けているところがあるように感じている。広大な中国では，漢民族を始め，壮族，回族，満族，ウイグル族，苗族，彝族，土家族，チベット族，モンゴル族等56の民族があり，80種類あまりの言語と28種類の文字が並存しているので，これから学ぼうとしている中国語は一体中国のどの言語で，どんな特徴を持っているか

ということを事前にしっかり指導しておかないと，その後の学習に混乱が生じやすくなると考える。

多民族と多言語の中国では，各民族はそれぞれの言語と文字を勝手に使用すると，国がまとまらなくなるため，政府は全国総人口の91.5％を占めている漢民族の言語である漢語を中国の公用語として定めている。今世界中に広く勉強されている中国語と言えば，中国漢民族の言語で，その民族の文字は漢字であることは中国語学習初心者に一番先に教えるべきことである。

中国語は国際連合における公用語の１つとして，台湾を含む海外では「国語」または「華語」とも言う。中国大陸の他，香港，マカオ，台湾，シンガポール，マレーシア，インドネシア，タイ王国などの国及び世界の華僑居住区地域では，その母語話者は13億７千万人以上がいると言われ，全世界人口の約20％を占めている。漢字は国と地域によって，形と画数が多少異なる。例えば，中国大陸では，画数の多い旧漢字を簡略化した「簡体字（日本語で言う新漢字）」を使用しているに対し，台湾，香港，マカオ，シンガポール等では，まだ「繁体字（日本語で言う旧漢字）」を多く使用している。

中国語の発音に関して，地域によって話す言葉は大きく異なる。同じ漢語の中には，大きく分けて北方方言，呉方言，湘方言，赣方言，客家方言，粤方言，闽方言の７つの方言が存在し，それぞれの方言音で話すと，互いに理解が難しい。そのため，政府は全国どこでも通じる「普通話」という共通語の使用を定めている。日本を含む世界中で「中国語」として広く学習されているのはこの「普通話」である。普通話の発音は「拼音（ピンイン）」というローマ字で表記され，全中国国内の小中高及び大学だけでなく，日本を含む海外では外国人を対象にした「対外漢語教育」という専門科目においてもオーラル・コミュニケーションの基本技能として徹底的に教えられている。

以上のように，中国語には他の外国語にあまり見られない特性があることから，初級の中国語教育において，まず学習初心者に中国語の文化的背景を把握させることは非常に大事なことで，いくら時間がなくても，省くべきことではないと考える。

３．発音指導の順序

外国語の文章を初めて見た時，さっぱり分からないのが普通のことである。しかし，面白いことに，日本人は中国語を全然勉強したことのない人でも，なんとか意味をとれる人が少なくない。それは日中両語とも“国家”，“学校”，“道路”，“商品”等字形から意味まで全く同じ語彙が多く使用されているためである。両国言語間にこういう共通点があるため，日本人が中国語を勉強する時には，漢字意味の暗記や書写練習に時間をかける必要が少ないように思われる。すなわち，発音さえできるようになれば，短期間内でもすぐ大量な中国語語彙を身に付けることは可能である。そういう意味で，日本人学習者にとって発音の習得は特別重要なことである。

漢字の読解に関して，日本人は上述したようなアドバンテージを持っているが，残念ながら，発音に関してそういうことは全くない。両国とも漢字を使用していても，互いに発音が違うから，中国語を聞く，話すことができるようになるためには，先に拼音で書かれた音声を正しく発音できるようにならないといけない。拼音という中国語の音組織には，「声母（子音）」23個，「韻母（母音）」36個，「声調（トーン）」４種があり，煩雑なだけではなく，日本語にはない音声が多数存在しているため，日本人学習者にとって中国語の発音は非常に難しい関門であると言ってもよい。発音入門段階において，いかに順序よく「声母」，「韻母」，「声調」を指導し，できるだけ日本人学習者を挫折させないことが肝要である。

3.1　単韻母の指導

拼音は先に来る「声母（日本語で言う「子音」）」と後に付く「韻母（日本語で言う「母音」及び「末子音」）」で組合せた音節，それからその音節の上に付ける「声調」の３要素で構成されている。拼音は声母で始まっていることから，中国の学校では，拼音の構成順に沿って先に声母から教えている。日本では，本場中国の指導法だからということで，そのまま利用している教員が多いようである。しかし，筆者は同意できない。

筆者は初めて発音を勉強する学習者には，単韻母からのスタートを勧めたい。その理由として，第１に，日本語の50音は「あいうえお」という単母音で始まっているから。日本人の馴染んでいる母音から始まると，心理的に受け入れやすい。第２に，音声上，中国語声母の語尾に単韻母の音が隠れているものが多いため，単韻母から始まると，後になる声母の勉強は入りやすくなる。第３に，上述した日本語にはない音声は声母に多数存在しているため，始めから声母を勉強すると難しく感じさせ，モチベーション低下の原因になる。第４に，中国語声調記号の位置は単韻母の順序により決めるので，単韻母を先に覚えておくと，次に勉強する声調の予習にもなる。

単韻母の指導に入る際，最初から単韻母を教えるより，日本語の母音と比較しながら，進めたほうが日本人学習者にとって易しいと思う。筆者の教育実践例として，下記の通り，まず，日本語の「あいうえお」を黒板にローマ字で「ａｉｕｅｏ」を書き，学習者に読ませる。当然，読めない人は一人もいない。それから，その下に中国語

６つの単韻母「ａｏｅｉｕü」を書き，上の日本語母音との相違点を考えさせながら，前回と同様に，また読ませる。今回は，６番目の「ü」だけは誰でも読めなかった。

日本語の単母音：　ａ　ｉ　ｕ　ｅ　ｏ

中国語の単韻母：　ａ　ｏ　ｅ　ｉ　ｕ　ü

この時点で，何にも説明しなくても，学習者は既に１番目の「a」以外に，中国語の単韻母の並ぶ順番は日本語と違うことと，数的に日本語より中国語のほうは１つの「ü」が多いことを気づくことができる。これにより，学習者は全く難しい感じがせず，簡単に単韻母の特徴を覚えられるようになる。

両者間の相違点は分かった上に，実際の発音勉強に入る。日本語にはない「ü」と独特の音価をもつ「e」は指導の重点となる。この２つの単韻母とも日本語にはない音声なので，日本語と比較して発音を指導する方法は良くないと思う。その理由として，日本語にはない発音だから，比べられるものがない。無理やり日本語と比較して指導を行うと，そのうち，学習者の発音はおかしくなりかねない。このことについて，筆者は日本で出版されている教科書に書かれている発音説明にちょっと気になるところがある。例えば，ある教科書[1]に，「ü」の発音について，「口笛を吹くときのように唇をつぼめて緊張させ，日本語の「イ」を発音する。」と書いてある。前半部分唇に関する説明は問題がないが，「日本語の「イ」を発音する。」という部分は日本人学習者に分かりやすいように説明しているという著者の意図を分かるが，このような説明は却って蛇足となり，学習者に間違った発音を覚えさせてしまいそうな感じがする。何故かというと，中国語の「ü」と日本語の「イ」と発音の根本的な違いは舌先にある。「イ」を発音する時，唇は微笑むように引いて，舌先は前歯の下につけたまま，ちょっと力を入れて発音しないといけないと思うが，「ü」の場合，「イ」のように舌先に力を入れて発音する必要がない。なので，筆者はその発音の指導説明について，「・・・，日本語の「イ」を発音する。」を「・・・，息を勢いよく出して発音する。」のように変えたほうが良いと考える。

また，同ページにある「e」の発音について，「日本語の「エ」を発音する時の唇の形で，喉の奥から息を出し「オ」を発音する。」と書いてあるが，その説明も学習者に誤解を与えやすい。その通りに発音すると，きっと中国語「e」の正しい発音にはならないと思う。この説明の問題も上述した例と同様に，後半の部分にある。中国語の「e」を発音する時，口を丸くする必要がないのに対し，日本語の「オ」を発音するように口を丸くするように指導してしているからである。「口が半開きのまま，一息を吸い，少し止めてから，喉の奥から軽く息を出して発音する。」のように説明すれば，学習者は誤解せず，綺麗な「e」の発音ができるようになると筆者は思う。残り４つの単韻母「a」「o」「i」「u」の発音について，日本語とほぼ同じので，特に注意する必要がなく，日本語よりやや声が高く発音すれば，正しい発音ができるようになれる。

日本語の「あいうえお」と同じように，中国語における６つの単韻母も決まった順番が与えられているので，先に正しい順で覚えておくことが重要である。暗記法として，真ん中から３つずつに分けて，「ａ ｏ ｅ／ｉ ｕ ü」と繰り返し音読練習すれば，リズム感があり，すぐに覚えられるようになる。

3.2　単韻母と英単語の発音を活用する声母指導

単韻母の学習が終わると，引き続き複合韻母に入るのが一般的な発音指導法だが，筆者はそうすべきではなく，声母の勉強に進めるほうが良いと考える。理由は，中国語声母の約半数の語尾に単韻母の音が隠れているため，普通のローマ字とは発音が全然違う。しかし，その語尾に隠されている単韻母を書き出すと，その声母は普通のローマ字とほぼ同じ発音になる。このコツを事前に指導しておけば，発音方法を特に教えなくても，学習者は先に覚えたばかりの単韻母と中学校レベルの英単語の発音知識で一気に多くの声母を発音できるようになる。それにより，学習者は中国語発音勉強に対して自信がつくようになり，学習意欲の向上にも繋がると考える。この指導法の効果とメリットは引き続き韻母の学習に入るよりずっと大きいと思う。

表１左右２つの声母表を比較しながら，これまで筆者の声母指導法を例として具体的に説明してみたい。

左側にあるのは通常の声母表で，右側にあるのは筆者長年指導時愛用した声母表である。最初は，初心者に左側の表だけを見せ，誰かに１から６行まで思った通りに全部音読させる。結果として，予想の通り，殆どの学習者は普通ローマ字の発音で読んでいた。それから，右側の表を見せて，声母の後ろの括弧中に書いてある音も含めて，もう一回思った通りに音読するよう指示する。今回の結果は前回と大分変った。殆どの学習者は３行目の「q(i)」と「x(i)」，４行目の「zh」，「ch」，「sh」，「r」，５行目の「z」，「c」，「s」以外の声母はなんと正しく発

表１　中国語声母表

1	b　p　m　f
2	d　t　n　l　g　k　h
3	j　q　x
4	zh　ch　sh　r
5	z　c　s
6	y　w

→

1	b(o) p(o) m(o) f(o)
2	d(e) t(e) n(e) l(e) g(e) k(e) h(e)
3	j(i)　q(i)　x(i)
4	zh　ch　sh　r
5	z　c　s
6	y(es)　w(ide)

音ができた。勿論，２行目語尾の「e」はまだ普通ローマ字のように発音した人がいたが，中国語単韻母の「e」は独特な発音であることを注意するよう指摘し，ちょっとその発音の復習をしただけで，その後，全員は２行目にある７つの声母を完璧に発音できるようになった。６行目２つの声母は英語の単語化にしたので，読めるようになったと思われるが，括弧中の部分を発音しないように指導すれば，「y」と「w」の発音はすぐできるようになる。この時点で，学習者はあっという間に，声母総数の約３分の２を占める14個の発音ができるようになっている。３行目の「q」と「x」，５行目の「z」，「c」，「s」はそれぞれ日本語の「ち」と「し」，「ず」「つ」「す」と酷似していることから，それらの発音を声母学習の参考音にすることは学習者に速く覚えさせる有効な指導法でもある。

以上の指導法により，中国語には声母23個があるにも係わらず，結局，実際に時間を掛けて勉強する必要があるのは「zh」，「ch」，「sh」，「r」の４つだけになる。これらの声母は「巻き舌音」または「反り舌音」と呼ばれ，日本語にはない音声なので，日本人の初心者にとっての難点中の難点である。発音入門段階において，重点的に指導し，慣れるまで繰り返し練習する必要がある。

3.3　日本人日常会話中の語気と比較する声調指導

中国語の発音にはもう一つ大きな特徴として，独特なイントネーションを持っていることである。中国語ではそれを「声調」と呼び，「四声」とも言う。声母と韻母で組み合せた音節の上につけるこの「声調」を学習する時，その下の音節が短ければ短いほど，発音しやすいため，声母と単韻母の発音をマスターした時点で，煩雑な韻母を勉強する前に，声調の学習に入るのが学習者にとって最も良いタイミングだと考える。

声調は拼音３要素の中一番難しい部分として，文字やイラストを兼用して細かく説明する中国語テキストがある。図１は日中両国とも「四声」を指導する時，欠かせない典型的な声母説明図である。「ド・レ・ミ・ファ・ソ」の５音階で「四声」の高さと矢印で「四声」の抑揚方向を示しているこの説明図は見た目で理解しやすいようだが，実際その通りに練習すると却って難しく感じてしまうかもしれない。

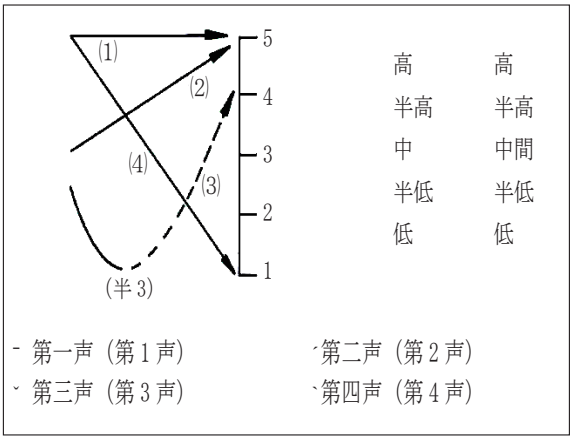

図１　声調説明図

「四声」のような抑揚は中国語だけの特徴だと思われがちだが，実は意外と日本人日常会話の中にもよく出ている。例えば，日本人は「ママ」を言う時の「マ」は声調の第１声のそのものである。また，何かが聞いて驚いた時の「え～？」とがっかりしている時の「ア～」という感嘆詞はそれぞれ声調の第２声及び第３声と酷似している。日本人は「バンザイ！」を言う時のあの「バン」は声調の第４声とそっくりである。日本人学習者にこのような特徴を教えると，多くはごく短時間で声調を正しく発音できるようになる。

以上の方法ですぐに声調の第１声，第２声，第３声，第４声をそれぞれ単独でうまく発音できるようになったとしても，日本語には中国語のように抑揚が単語毎に出るわけではないため，日本人学習者はその発音に慣れるまで特別な訓練が必要である。短期間内で「四声」の発音に慣れるように，筆者は一番発音しやすい音節「ma」を利用した声調指導法を行っている。具体的に，最初は「mā　má　mǎ　mà」のように第１声から第４声まで順番よく学習者に音読させる。慣れてきたら，「mā　má　mà　mǎ」，「mā　mǎ　má　mà」，「mā　mà　mǎ　má」のように順番を変え，はやぐちことば練習のように繰り返し音読させる。このような練習を通して，間違いなく速く読めるようになれば，ほかの拼音を見た時も声調を正しく発音できるようになる。

３．４　日本語の発音と比較する韻母指導法

単韻母，声母及び声調が発音できるようになったら，日本人学習者にとって，中国語拼音の発音はほぼ出来ていると言っても過言ではない。中国語の韻母は31個もあり，多く見えるが，それの殆どは単韻母で組み合わせ２重韻母や３重韻母及び「ｎ」と「ｎｇ」が付く鼻音なので，日本人にとって発音が難しい音声がないからである。日本人のあまり慣れてない鼻韻音の発音と３重韻母の省略用法のみを重点的に指導すれば，だれでも簡単に韻母のすべてをマスターできると考える。

表２の「韻母表」を見ながら，韻母の指導法を説明してみたい。

１番の上は既に習得済みの単韻母で，２行目にある複合韻母は２つまたは３つの単韻母で組み合わせた２重韻母か３重韻母である。３行目と４行目は母音の後ろに

表２　中国語韻母表

単韻母	a	o	e	i	u	ü
複合韻母	ai ao	ou	ei	ia ie iao iou	ua uo uai uei	üe
前鼻韻母	an		en	ian in	uan uen	üan ün
後鼻韻母	ang	ong	eng	iang ing iong	uang ueng	
そり舌韻母			er			

「n」か「ng」が付く前・後鼻韻母で，５行目は韻母中唯一のそり舌音である。これまで筆者の20数年間にわたる日本での教育経験の中で，韻母の発音を教える前に，反り舌音「er」を除き，全く読めない初心者は一人もいなかった。中国語韻母の発音は基本的にローマ字の発音と大きく変わらないからである。

勿論，殆どの人は最初から完璧に発音できるわけではない。その中に「n」の付く前鼻韻母と「ng」の付く後鼻韻母は初心者にとってうまく発音し分けることのできない音声である。特に「ng」の付く後鼻韻母は日本語にはめったに出ないため，日本人にとっては難しいようである。指導する際，日本語の「案内（annai)」と「案外 (angai)」との違いを例として説明すれば，学生はあっという間にそのコツをつかまえ，正確に前・後鼻韻母の発音ができるようになる。最初発音できなかった「er」について，学習者に「e」を発音する時，舌先を上にあげるように指導すれば，この韻母もすぐできるようになる。授業中，韻母の練習を指導する際，学習者の身近なこと，例えば，名前，所属，地名，文具，家具，家電製品など中国語の漢字を黒板に板書し，その上に拼音を付けて全員に発音させれば，学習者は興味津々になり，積極的に発音練習に参加し，勉強の意欲が一気に高まる。実はこの時点で，学習者は既にうまく拼音を読めるようになっている。学習者が書いた拼音を正しく読めた途端に，筆者は励ますようにすぐ拍手を送り，褒めてあげる。すると学習者の拼音を読めるようになった達成感と喜びが筆者にも伝わってくる。これは筆者が韻母の指導を最後にする理由である。

韻母指導において，発音練習以外に，韻母中にあるいくつかの「落とし穴」を重点的に教える必要がある。「拼音」は，1950年代，中国の言語学者によって開発されたものである。中国人発音の特徴に基づいて作られた拼音には，外国人にとって誤解しやすい音声ルールがいくつか存在している。例えば，「iou」→「iu」，「uei」→「ui」，「uen」→「un」の３つの複合韻母。矢印左側３つの発音はそれぞれ真ん中の「o」，「e」，「e」は省略して，矢印右側のように書く約束になっている。例えば，牛奶「ni(o) ú nǎi」，睡覚「shu(e) ì jiào」，春天「chū(e)n tiān」等のような単語。また，単韻母「ù」，複合母音「üe」，前鼻韻母「üan」と「ün」の場合，「j」，「q」，「x」，「y」の４つの声母と組み合わせる時，üの上の「‥」も書かないようになっている。例えば，句「jù」，去「qù」，需「xū」，雨「y ǔ」のような単語。「j」，「q」，「x」，「y」の後ろに「u」，「ue」，「un」と「un」の付く音節は中国語にないため，誤解を招く心配はない。このような表記方法は通常ローマ字発音の観点から言うと，非合理的で，外国人学習者にとっては却って省略しないほうが分かりやすいかもしれないが，拼音は国家として決定している表記法であるから，中国拼音の特徴として，そのまま覚えるしかない。これまで，これらのルールを知らず，通常ローマ字の発音を思い込んで発音を間違って覚えた学習者を筆者は多く見てきた。最初から間違った発音を覚えてしまうと，癖となり，後はなかなか直せなくなる恐れがあるため，初級発音段階において，学習者にこのような発音を重点的に指導することは極めて大事なことである。また，これらのルールは初級発音入門段階において完全に覚えきれるものではないため，その後の学習の中，そのような関連韻母は単語に出るたびに繰り返し強調して説明する必要がある。

４．終わりに

以上の発音指導法により，日本人は中国語の拼音を学習する時，声母23個の中で，「zh，ch，sh，r」の４音，韻母31個の中で，「e，ü，er」の３音，計７音だけの音声は最初から特に注意して学習する必要があることを判明した。声調のことについて，日常会話の中に「四声」とよく似ている言葉を想定して練習すれば，日本人だれでも簡単に発音できるようになることも確認できた。結論として，日本語と中国語との共通点及び相違点を見分けた上に，それぞれを中国語発音学習の参照物として活用すれば，難しいと思われている中国語の発音は意外と易しくなり，短期間内で楽にマスターすることが十分可能である。

2011年改正された文部科学省「小中学校国語学習指導要領」によると，小学校卒業までに1,006字，中学校卒業までに1,130字，合計2,136個の漢字を習わないといけないこととなっているが，この数は日本の常用漢字数とちょうど合致している。日本では旧漢字が多く使われていると思われがちだが，筆者が統計した結果，日本

の常用漢字の中，中国語の簡体字と全く同じ字形の漢字は1,431個があり，常用漢字総数の67％を占めている。

中国政府公認の中国語能力試験 HSK は１級から６級までの６段階，３つのレベルに分けられている。１級から２級までは初級で，300字の語彙量，３級から４級までは中級で，1,200字の語彙量，５級から６級までは上級で，5,000字の語彙量が必要になっている。HSK 中級レベルの語彙量に注目すると，その数は上述した日本の常用漢字中にある中国語の簡体字と全く同じ字形の漢字数よりも231字が少ないことが分かる。それら日本語の漢字は，中国語の漢字とは字形が全く同じであり，その意味も一部漢字の違いがある以外に，殆どは意味も似ている。

外国語で読み，聞き，話す時，いくら文法に精通しても単語の意味または発音が分からないと，どうにもならないことは周知の通りである。外国語能力の決め手は語彙量である。日本人中国語学習者は上述した中国語の簡体字と同じ字形の常用漢字の発音さえ覚えられれば，短期間内で一気に中国語中級レベル圏に入ることが可能なのである。そのためには，いかに速く発音の拼音をマスターするかということが最も肝要なことである。

（注）

[1] 本間史・孟広学「中国語ポイント55」Ｐ8，白水社 2014年12月10日出版

参考文献

馮富榮（2008）「中国語新幹線　初級表現　上」北京言語大学出版社

胡玉華・宇野忍（2005）「日本人の中国語初学者に声調学習を援助する際の効果的方法に関する研究」教育心理学研究　第53巻　第４号

本間史・孟広学（2007）「中国語ポイント55」白水社

輿水優・李继禹（1996）「中国滞在・中国旅行　役に立つ中国語会話」三修社

康玉华　来思平（2006）「中国語会話　301句　上」北京言語大学出版社

馬鳳如（1997）「中国語の発音と会話」山口県立大学国際文化学部紀要　第３号

文部科学省（2011）「小中学校国語学習指導要領」

宁继鸣（2013）「中国概况 A Survey of China」北京言語大学出版社

秦　燕（2001）「中国語会話が面白いほどできる本」中経出版

鈴木義昭・王延偉（1999）「中国語が面白いほど身につく本」中経出版

紹文周（2005）「入門　これならできる　中国語の勉強法」中経出版

中国語検定：中検ならHSK　HSK各級の一覧表 http://www.hskj.jp/level/index.html